

# 第二次おきのえらぶ島観光基本計画 (案)

2025年2月

## 目次

# 1. 計画策定にあたって

## (1) 計画策定の目的

沖永良部島では、2015（平成27）年4月に一般社団法人おきのえらぶ島観光協会が設立。1島2町の中で、観光協会を両町の垣根を越えて一つの島の観光協会として運営していくことになりました。その後、DMO（Destination Management/Marketing Organization）化による官民の幅広い連携によって観光地域づくりを推進する法人化を目指してきました。2017（平成29）年3月には、そのための第一次おきのえらぶ島観光基本計画「Island Plus おきのえらぶ島計画」を策定。さまざまな事業を行いながら、計画に則った沖永良部島の観光推進を図ってきました。

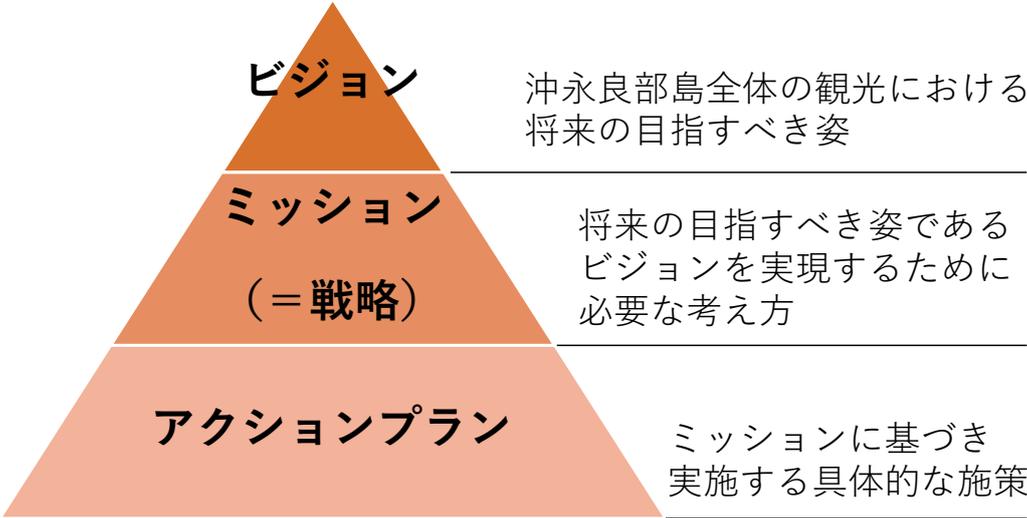
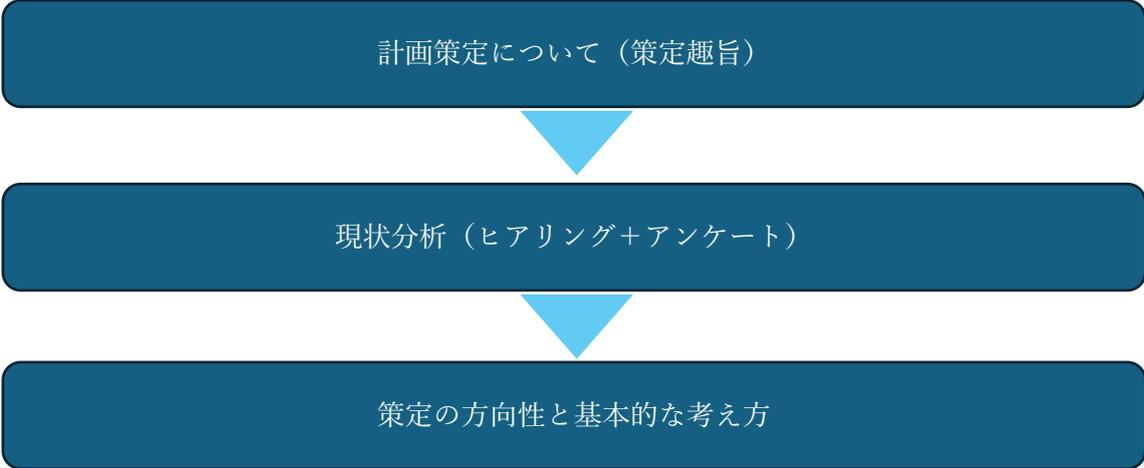
しかし、2020（令和2）年からの新型コロナウイルス感染拡大と、それに伴う社会変容によって、当初の計画通りに事業推進を行うことができないまま、計画期間の5年間（2017～2022（平成27～令和4）年）を終えることになりました。2024（令和6）年、新型コロナウイルス感染拡大の影響が落ち着き、沖永良部島への観光客も戻り始めたことから、第一次おきのえらぶ島観光基本計画の見直しを実施。改めて、観光事業者はもちろん、地域として沖永良部島に暮らす人々の観光に関する考え方を把握し、地域住民が観光で幸せになるための方向性を観光協会ならびに両町役場とで検討。観光協会を核として、両町役場と島で暮らす島民の皆様、島外から沖永良部島に関わる人たち、その全てが共通目標にできる指針を定めることで、これからの沖永良部島のさらなる観光推進を図るために、第二次おきのえらぶ島観光基本計画を策定することとします。

## (2) 計画の位置付け

第二次おきのえらぶ島観光基本計画は、国が定める「観光立国推進基本計画」や鹿児島県の「観光立県かごしま県民条例に基づく基本方針（鹿児島県観光振興基本方針）」、「奄美群島観光しまづくりプラン」等の策定趣旨や理念等を踏まえつつ、沖永良部島の和泊町・知名町の両町の最上位計画である第六次和泊町総合振興計画ならびに、第六次知名町総合振興計画等との連携・整合性を図っていきます。

## (3) 計画の構成

第二次おきのえらぶ島観光基本計画においては、大きく6項目で構成しています。冒頭では計画策定について、策定の趣旨を明確化します。その後に、観光事業者の方々へのヒアリングや島民・行政・観光客へのアンケート結果。それらを踏まえた基本的な考え方、沖永良部島全体の観光における将来の目指すべき姿（＝ビジョン）、ビジョンを実現するために必要な考え方であるミッション（＝戦略）、最後にミッションに基づいて実施する具体的な施策（アクションプラン）となります。



(4) 計画の期間

第二次おきのえらぶ島観光基本計画の計画期間は、2025（令和7）年度から2029（令和11）年度までの5年間とします。観光施策は社会情勢等の変化による影響が大きいことから、5年間の計画期間内において、年度ごとにアクションプランの点検・評価・検証を行いながら、必要に応じて計画内容の見直し等を行います。

見直しにあたっては、沖永良部島内外の有識者を中心とした第二次観光基本計画策定協議会の開催等により、PDCAサイクルの運用を図ります。

<PDCA 図版入れる>

## 2. 沖永良部島観光のいま

### (1) 沖永良部島の観光について三者意見交換

計画策定にあたって、一般社団法人おきのえらぶ島観光協会と和泊町、知名町、それぞれの会長・町長による意見交換を実施。徳田英輔観光協会長と前登志朗和泊町長、今井力夫知名町長に現在の沖永良部島の観光についてお話を伺いました。沖永良部島観光推進の中核となる3者から、それぞれの視点で島の観光の強みと課題を語っていただいています。

徳田観光協会長（以下、徳田会長）：

第一次おきのえらぶ島観光基本計画では、100年先を見据えた計画として2017（平成29）年に策定し、進めてきました。2021（令和3）年までの5ヵ年計画で進めてきましたが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、計画策定時に定めた事業内容の中でも進められなかったものもありました。第二次おきのえらぶ島観光基本計画についても、本来は2022（令和4）年から進めたかったところではあるものの、1年遅れての策定・実施となりました。前計画でできたこと、できなかったこと、両方を踏まえて、これからの沖永良部島の観光を進めていければと考えています。

前登志朗和泊町長（以下、前和泊町長）：

前計画があって、当時は私自身が観光協会長をしていて、当時の行政との連携など、進めきれなかった部分はあったが、あの計画があったから奄美群島の中でも沖永良部島が全体をリードしていけるような立ち位置にいられたと思います。新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、停滞した部分、これまでの観光の形から変わった部分はあったものの、着地型コンテンツであったり、ゼロカーボンの動きとか、今後、沖永良部島の取り組みとして、良いリスタートができるタイミングだと思う。

今井力夫知名町長（以下、今井知名町長）：

新型コロナウイルス感染拡大以前から沖永良部島は観光に目を向けていなかったように感じます。そもそも、観光を盛り上げるという文化、素地がある島ではなかったと思います。とはいえ、これだけ人口減少が進んでいる時代で、農業だけでなく観光に目を向けることは必要だと考えています。特に、農業と観光を複合型で組み合わせていくことがいいのではないかと思います。農業は、農地の面積が決まっています。各農家が耕作面積を広げようとしています。これから若者が帰ってきてやれるような新しい農業の形をバックアップしていきたいですね。奄美大島と徳之島の一部が世界自然遺産に選ばれましたが、沖永良部島が取り残されたのは、観光の素地が少ない島の文化・考え方によるところが、少なからずあるのではと思います。これからの観光を進めていく上で、そういった島の文

化・考え方とも融合していかないといけない。そう考えると、沖永良部島独自・シャイな島民性・ハートフルな体験といった要素を絡めた農業体験などいいのではないかと思っています。

徳田会長：

たしかに沖永良部島は農業が中心の島で、商業・工業も含めて、これからさらに人口減少が進んでいくと思いますが、島外からの人の流入を呼び込んで、農業との両輪で考えていくのは、島にマッチした考え方だと思います。島民の方々も商売をされている方々も、外から人を呼び込んでくることで、さまざまなメリットがあると思います。

今井知名町長：

農業との連携と同時に、奄美群島という視点も大事だと思います。群島全体で連携していくことで、今以上に島独自のものを作り出していけるのではないのでしょうか。

前和泊町長：

農業との連携・融合は、これからの島の未来をつくるとても大事な要素。農業の島として、後継者もUターンで戻ってきたり、新たに移住されたり、がんばってくれています。雇用を創出して若い世代が地元に住み続けられるような、農業と連動したコンテンツというのは、観光としてとても重要な要素になるのではないかと思います。観光が発展することによって伝統芸能が守られることにつながるし、観光振興によって自然環境の保全につながる。そういった側面も含めて、島の人たちは観光にすごい関心がありますよね。地域のアイデンティティを強化するという意味では、どんな観光のあり方を目指していくのかはとても大切です。同時に、観光を進めることによって地域の中での消費にもつながっていくので、今回の計画でそういったところを盛り込んでいければいいのではと思います。

徳田会長：

宿泊施設とか特産品とか課題は色々ありますが、一番はいかに関係人口をつくっていくか。島に住んでいる我々が沖永良部島のことを好きで、そこに人をつなげていくこと。そのためには、島の子どもたちにも島のことをキチンと伝えて、島を好きになってもらいたい。関係人口を増やすということは、沖永良部島のが好きな人をつくっていくことです。その文脈で考えると、大きい課題は旅費交通費ですね。島に来てもらうためには、限られた移動手段で来なければいけない。当然、交通費がかさみますからね。

前和泊町長：

農業をはじめとして、さまざまな領域と観光が連携できるようになることが大切だと考えます。それも、ただ一緒にやるのではなく、しっかりと経済的な裏付けがあった上で、関

わる人たちがウィン・ウィンになるやり方が必要だと思います。

今井知名町長：

他地域と比較しても沖永良部島のポテンシャルは高いと感じる。とはいえ、観光客を幅広く集めるのではなく、ターゲットを絞った取り組みを行なっていくことが大切ではないかと思います。沖永良部島を訪れる多様な属性の人たちに対して、ターゲットを絞った観光プログラムをつくっていくことができればいいのではないか。

前和泊町長：

たしかに沖永良部島の魅力はたくさんあります。課題として、そういったものをいかにつないでいくか。点を線から面にしていけないと、現状は観光業だけでは食べていけない。年間通してお客様を迎えていけるような、例えば他の領域との連携で着地型メニューを増やすなど、そういった取り組みをしていくことが必要だと思います。そのためには、地域内での調和が重要。地域を巻き込みながらコンテンツをたくさんつくって、島民みんなで行き組んでいくような意識づけができるようになると、島の中で観光人材を増やしていくことができる。そのためには、観光協会から優秀な観光人材を増やしていくことだと思います。そういった人材が中学校や高校に来てくれて、観光専門的な人材育成ができるのが理想的だと思います。

徳田会長：

あとはインバウンドをどう考えていくかも重要ですね。沖永良部島自体は、現状はほとんど来ていない状態です。

今井知名町長：

インバウンドをどう定義づけるかも必要。大きく2方向あると思いますが、一つはクルーズ船。これは現状だと受け入れ環境的に、小さい船しか来ることができない。この対応を今後どうしていくか、というのは一つの課題かもしれないですね。もう一つの方向性として、ツアー等に入っていない、個人旅行での外国人対応。地域の中で外国人に慣れている人も限られているので、島全体で考え方を育てていかないといけないと考えています。これからの沖永良部島の観光を考えた時に、昔は観光は稼ぐためにするもの、という考え方が主流だったように思います。今は、交流・関係人口を増やすことで、この地域に住みたい人を増やすことという考え方もあります。これまでの観光という一次的な捉え方ではなく、複合的なところがこれからの観光ではないでしょうか。その中で、これまでになかったような新しい仕事生まれて、島というものを大きく動かす力になるかもしれないと考えています。

前和泊町長：

これからのことを考えるのであれば、やはり持続可能な島をつくるために、持続可能な観光を確立する必要があると思います。前計画の時に、アイランドプラス認証をつくりました。島ならではの視点で品質も含めて、認証制度を設けました。途中で途絶えてしまった部分もありますが、非常に中身のある良いコンテンツだったのではないかと思います。そういった取り組みを進めていくことも重要です。

徳田会長：

前計画を踏まえて、今までは中核となる観光協会のみで進めていた印象です。これまでの話の中でも、農業との連携や関係人口創出など、地域づくりと密接に関わる部分が多いというご意見がありましたが、そういった意味で、和泊町・知名町の両町との連携を密にして、両輪ではなく三輪で観光振興を進めていきたいと考えています。当然、観光のみではなく、島全体のことを考えながら。今、奄美群島全体で見ると奄美群島観光物産協会があるが、どうしても事務局中心で進んでいるように感じます。もっと各島からの発信が必要だと思いますし、それを沖永良部島は率先して行なっていきたいと思っています。

今井知名町長：

そういう意味では、徳之島・与論島も含めた南三島という考え方も大事。沖縄との連携も含めて、鹿児島県にある琉球という捉え方もできます。今、沖縄には1000万人以上が流入してきています。これをどうやって奄美群島に持ってくるか。一足飛びに進めていくのは難しいし、沖縄の文化と我々の文化を比較した時に、どう差別化していくのか。個人的に思うのは、沖永良部島はぼーっとできる島。沖縄や他の地域とは違う価値を持っていると思います。だから、沖縄のようにたくさん呼び必要はないのかもしれない。身の丈にあったサイズ感でやっていくことが必要だと思います。そういう意味では観光協会には、もっと沖永良部島の文化を体験できるプログラムを組んでもらいたいですね。観光客が集まるだけでなく、そこに島を体感できるものを組み合わせることで、沖永良部島をもっと楽しんでいただけるようになるんじゃないかと思います。

前和泊町長：

観光は、他の地域の光を観るものだと思います。観光協会にはぜひ、そういった発信の場になってもらいたいと思っています。沖永良部島の魅力を観光協会が発掘してコンテンツ化する中で、地域の人たちとの連携もどんどん進めて、稼いでいってほしい。この計画を通じて、すでに集めているたくさんの方のデータを組み合わせながら、作戦を立てて戦略的に沖永良部島の観光振興に取り組んでほしいですね。

徳田会長：

両町とこれまで以上に密に連携をとりながら、子や孫に自信を持って伝えていけるような島をつくっていくことが一番大事だと考えています。そういった取り組みを、第二次おきのえらぶ島観光基本計画で進めていきたいと思っています。

## (2) 主要な観光資源とコンテンツ

沖永良部島は、鹿児島から沖縄、台湾へと連なる南西諸島のほぼ中央、奄美群島の南部に位置し、和泊町（わどまりちょう）と知名町（ちなちょう）の2町から成り立っています。

島の歴史は、先史時代にまで遡ります。島内の遺跡からは、縄文期の遺品が出土しており、古代から人々が暮らしていたことが確認されています。発掘された遺品からは、大陸から琉球を経て薩摩、大和へと続く通商経路「海の道」の重要な通過点のひとつとなっていたことが分かっています。

14世紀ごろには琉球北山国の勢力に組み込まれ、この時期に島を統治したとされる「世之主（よのぬし）」の伝説が数多く残され、島の言葉や唄、踊りなど、民俗文化の基礎はこの時期に形成されたと考えられています。

その後17世紀には薩摩藩の支配下に置かれ、薩摩との交易を通じて経済的な発展を遂げました。明治維新の立役者である西郷隆盛が島流しとなった地であり、島役人や島の人々の温かい交流の歴史が伝えられています。

伝統工芸品である芭蕉布製造技術や登録無形民俗文化財となっている黒糖製造技術、奄美群島でしか製造できない黒糖焼酎の醸造技術は、島の自然資源と歴史、暮らし、なりわいと絡み合い、沖縄と奄美のつながりを有機的に象徴するものとして今に引き継がれています。

地質は隆起サンゴ礁で形成されており、平坦な地形が広がる一方、海岸線にはダイナミックな断崖や美しい白砂の浜が点在します。小さな白色の砂浜が点在し、ウミガメの生息地、産卵地となっています。冬から春先にかけては、周辺海域でクジラの回遊する姿も確認できます。また、近海は、ギンガメアジなど巨大魚の群れが観察できる国内でも貴重なダイビングポイントです。

島の地下には多くの鍾乳洞が発達しており、国内でも屈指のケイビング（洞窟探検）の名所として知られています。観光向けに整備された昇竜洞もあり、気軽に地底の神秘を味わうこともできます。

2017年には、島の一部が奄美群島国立公園に指定されました。特に、島の北海岸側に位置する「フーチャ」や「田皆岬（たみなみさき）」は、雄大な断崖とエメラルドグリーン海のコントラストが美しく、自然の迫力を体感できるスポットです。

「えらぶゆり」の名で知られるテッポウユリの名産地であり、切り花や球根が全国の市場へ出荷されるほか、観光資源としても活用されています。4月中旬から5月初旬にかけて見頃を迎える笠石海浜公園のゆり園には、毎年多くの方が純白のえらぶゆりを鑑賞しに訪れます。

自然資源を活かしたマリレジャーも盛んで、農業体験やエコツアーなど多様なプログラムが提供されてきました。近年は島の日常や暮らしに着目した、持続可能な目線でのプログラム開発や充実化が進められています。

### (3) 観光のいま

3年以上続いたコロナ禍の影響で、国内外ともに人流が落ち込みました。沖永良部島でも2020年から2022年にかけて入込客数は大幅に減少しましたが、2025年現在は回復基調にあります。

#### ① 入込客数

2019年の90,959人に対し、2020年には51,936人と4割以上減となりましたが、コロナの鎮静化に伴い、2023年には80,526人まで回復しました。

2021年から2024年までの入込客数に重ねて表記している折れ線グラフは、公益社団法人日本観光振興協会が集計しているデジタル観光統計オープンデータで推計された島外からの来訪者人数です。スマートフォンGPSデータの位置情報データを活用して集計されています。



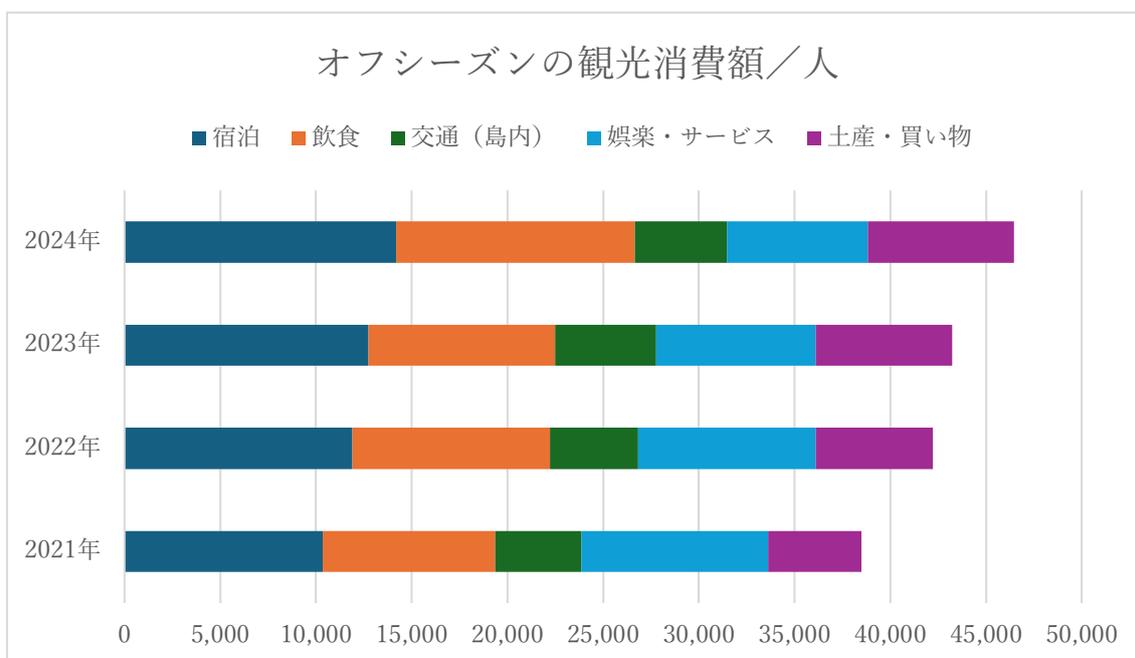
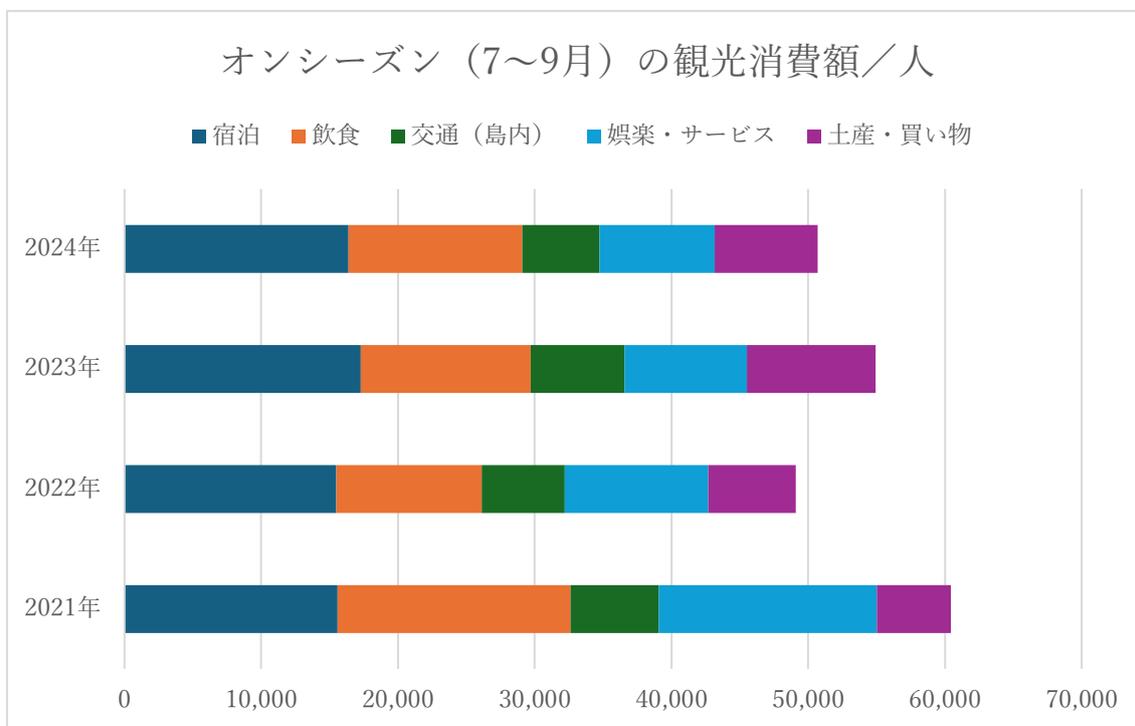
出所：鹿児島県観光統計 デジタル観光統計オープンデータ（公益社団法人 日本観光振興協会）

#### ② 観光消費額

和泊知名両町は2020年11月に「おきのえらぶ島観光モニタリングアンケート」を制作し、おきのえらぶ島観光協会は両町と共にデータ収集の協力を続けてきました。観光客向け

名刺サイズのカード等を配布し、QRコードから回答いただくオンラインアンケートです。

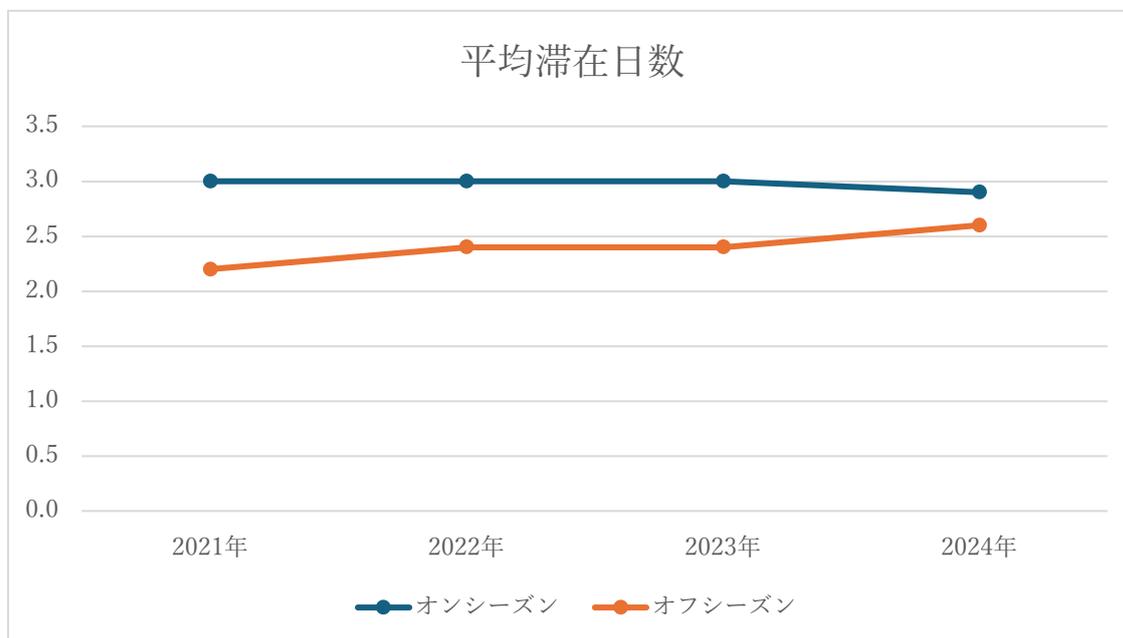
2025年1月現在、2,297件の回答が集まっており、観光客等の消費行動平均値を算出することができます。



出所：おきのえらぶ島観光モニタリングアンケート

調査対象：沖永良部島に観光・ビジネス・帰省等で訪れた来訪者（年齢不問）

回答総数：2,291 件



出所：おきのえらぶ島観光モニタリングアンケート

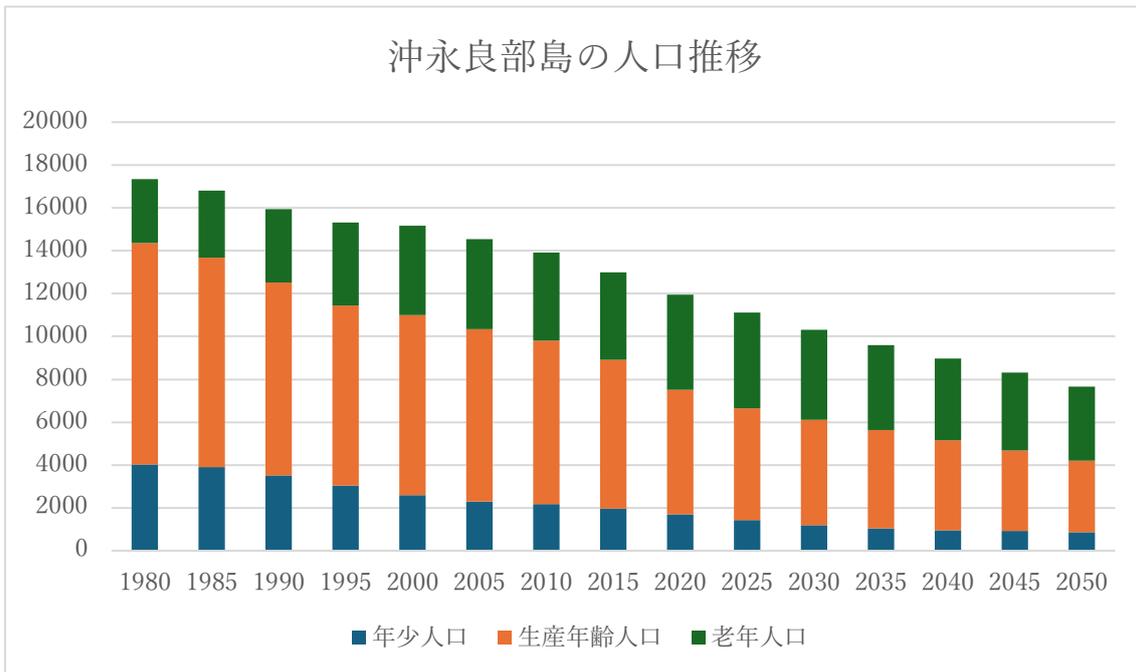
調査対象：沖永良部島に観光・ビジネス・帰省等で訪れた来訪者（年齢不問）

回答総数：2,291 件

#### (4) 観光に携わる担い手の現状

##### ① 人口構成

沖永良部島は毎年人口減少が進んでおり、RESAS 推計によると、2025 年で 11,101 人、このうち主要な働き手である生産年齢人口（15～64 歳）は 5,218 人（47%）で、人口に占める割合も縮小傾向が見られます。特に若年層の島外への流出が続いており、観光産業のみならず地域地場産業全体の新たな担い手となる人材の確保が課題となっています。



出所：国勢調査人口推移と「日本の地域別将来推計人口（令和 5（2023）年推計）」国立社会保障・人口問題研究所

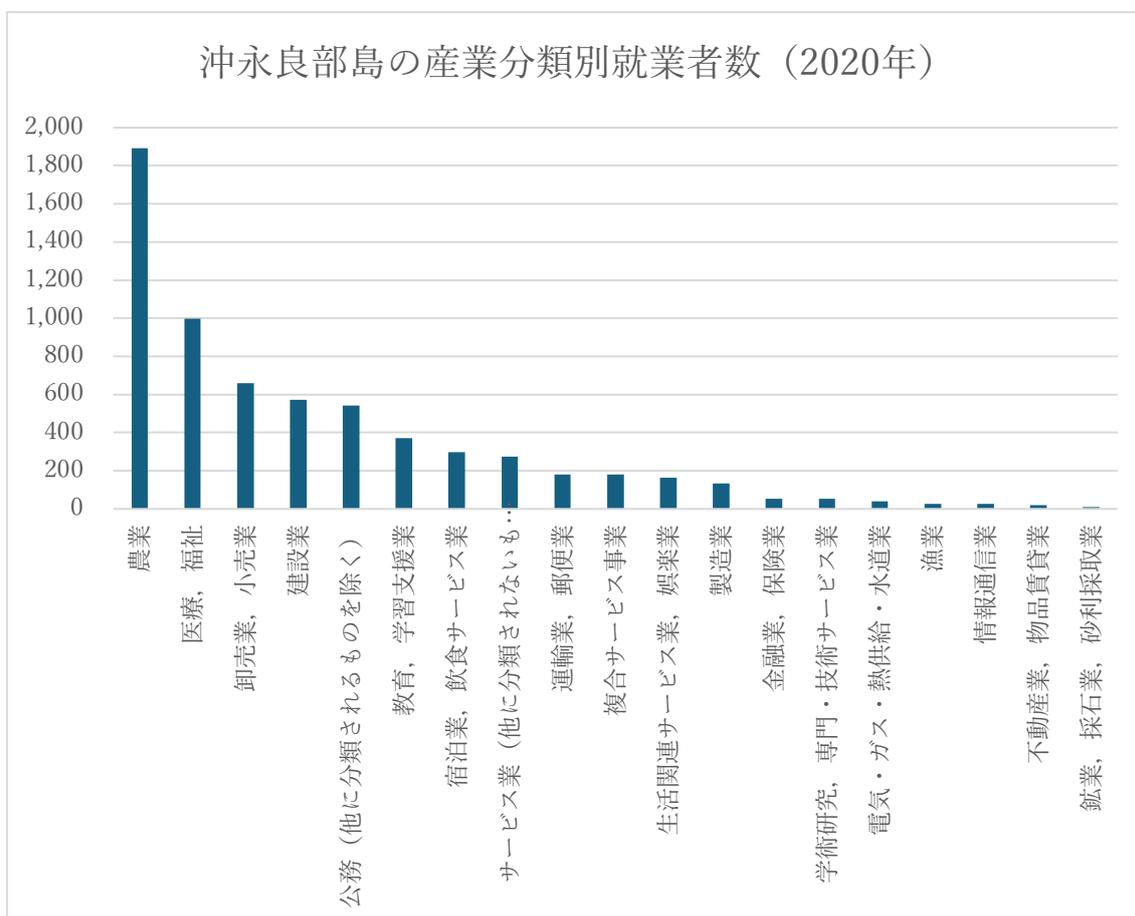
## ② 観光関連産業の現状

おきのえらぶ島観光協会の会員数は 203 件で、その内訳は業種別に宿泊【20】件、ガイド【12】件、飲食【32】件、交通【29】件、物産【62】件、その他企業サービス【48】件となっています。

宿泊施設件数には小刻みな上昇が見られます。また、産業別就業者グラフでは、小売業、宿泊業、飲食サービス業、娯楽業や対個人への各種サービス業など、観光にも結びつきの強い業種に従事している人数が分かります。地域の食などを通じた農業・漁業などとの関連性を含めると、島内での観光の役割は大きいと言えます。

年	軒数	収容人数（人）
2018年	28	468
2019年	35	501
2020年	36	548
2021年	34	528
2022年	32	514
2023年	30	502
2024年	34	537

出所：内閣府/RESAS - 地域経済分析システム



出所：令和2年国勢調査

#### (5) 観光客から見た評価と意識

「おきのえらぶ島観光モニタリングアンケート」によると、フーチャ・日本一のガジュマル・田皆岬・ワンジョビーチ・昇竜洞など、奄美群島国立公園にも指定されている自然景勝地が人気を集めていることが分かります。また、滞在中の活動内容からは、自然景勝地の訪問だけでなく、グルメやまち歩き、ショッピング、ケイビング等の体験アクティビティのほか、ビジネスユースの来訪者や島民との交流を楽しむ層も多いことが分かります。

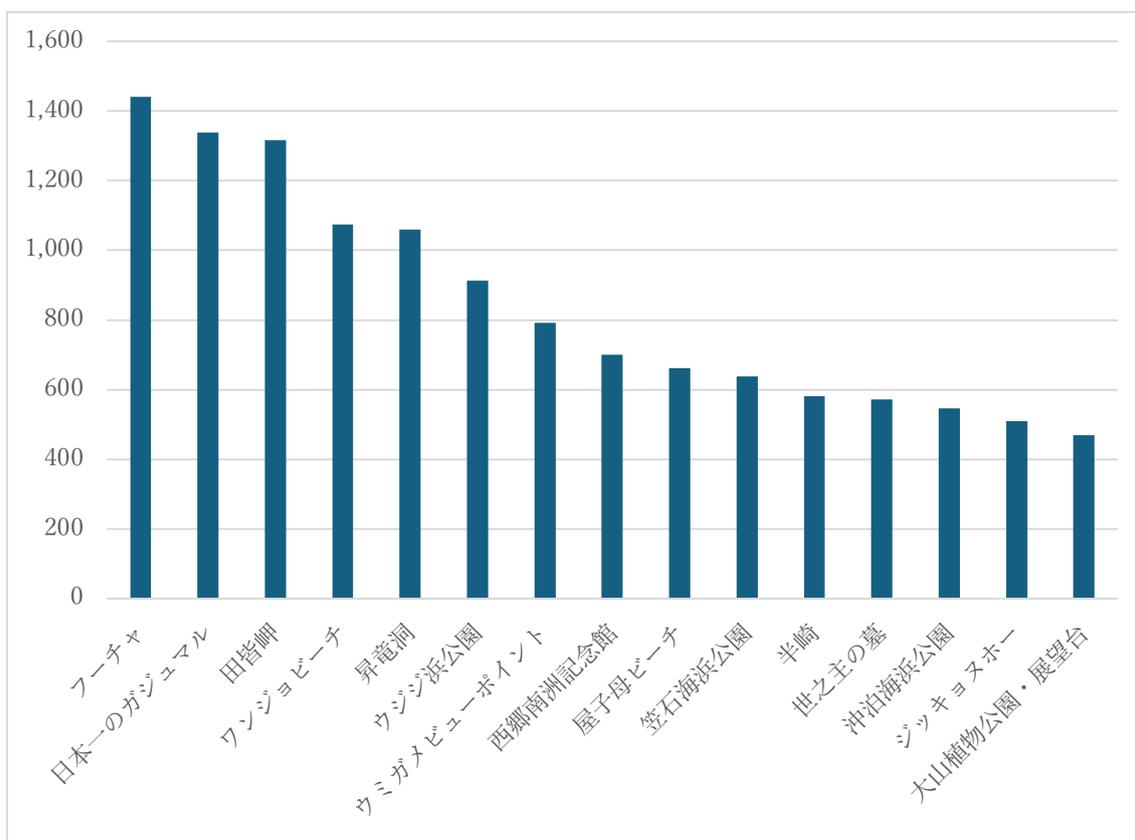


図 沖永良部島を訪れた際の訪問先

出所：おきのえらぶ島観光モニタリングアンケート

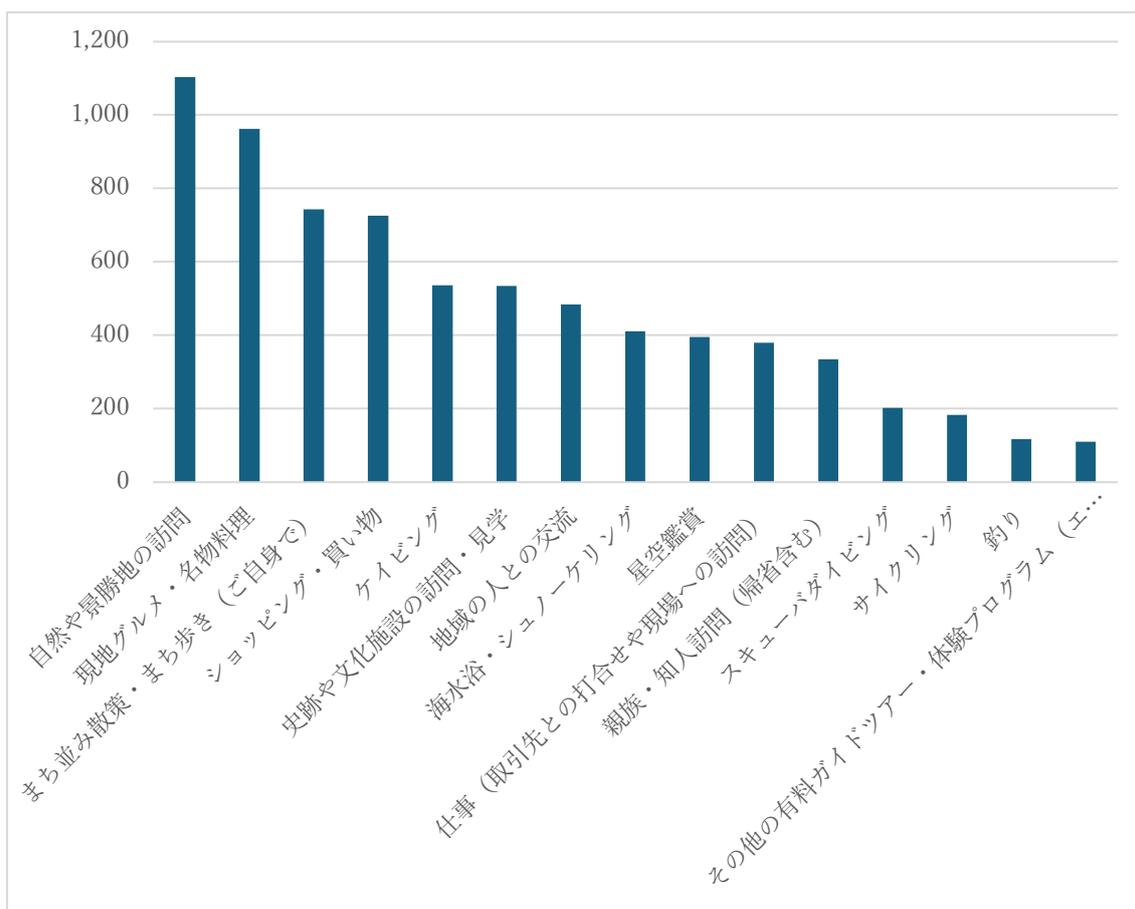


図 沖永良部島を訪れた人々の活動内容

出所：おきのえらぶ島観光モニタリングアンケート

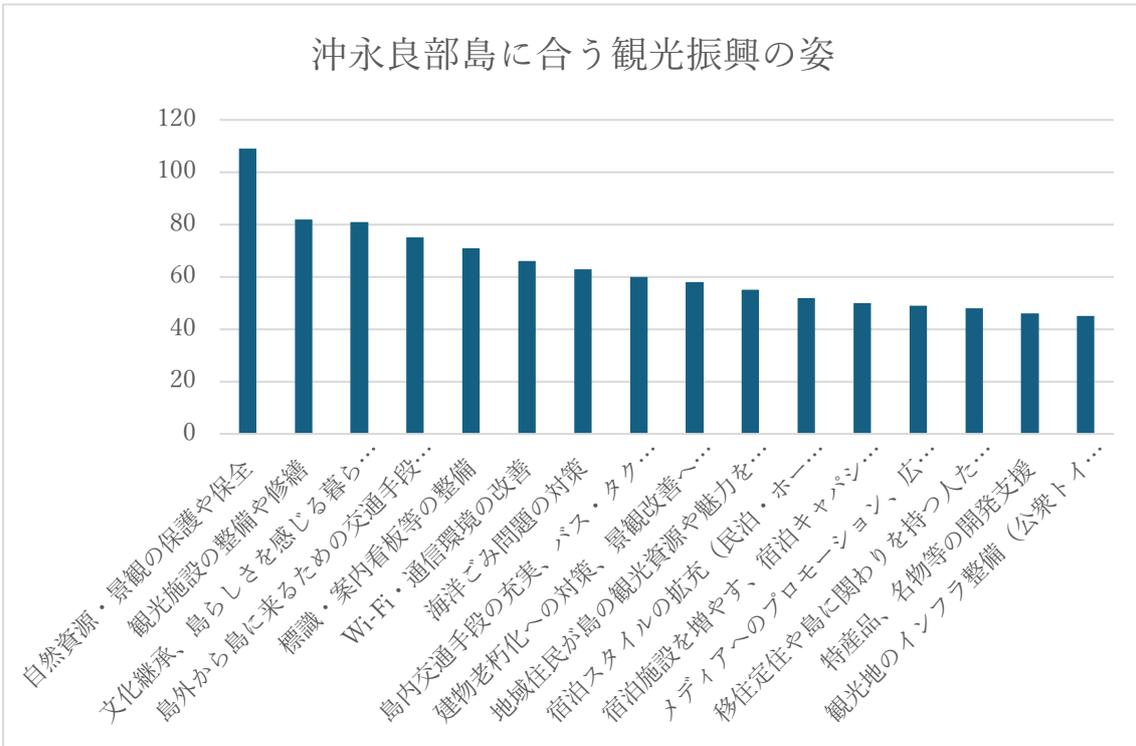
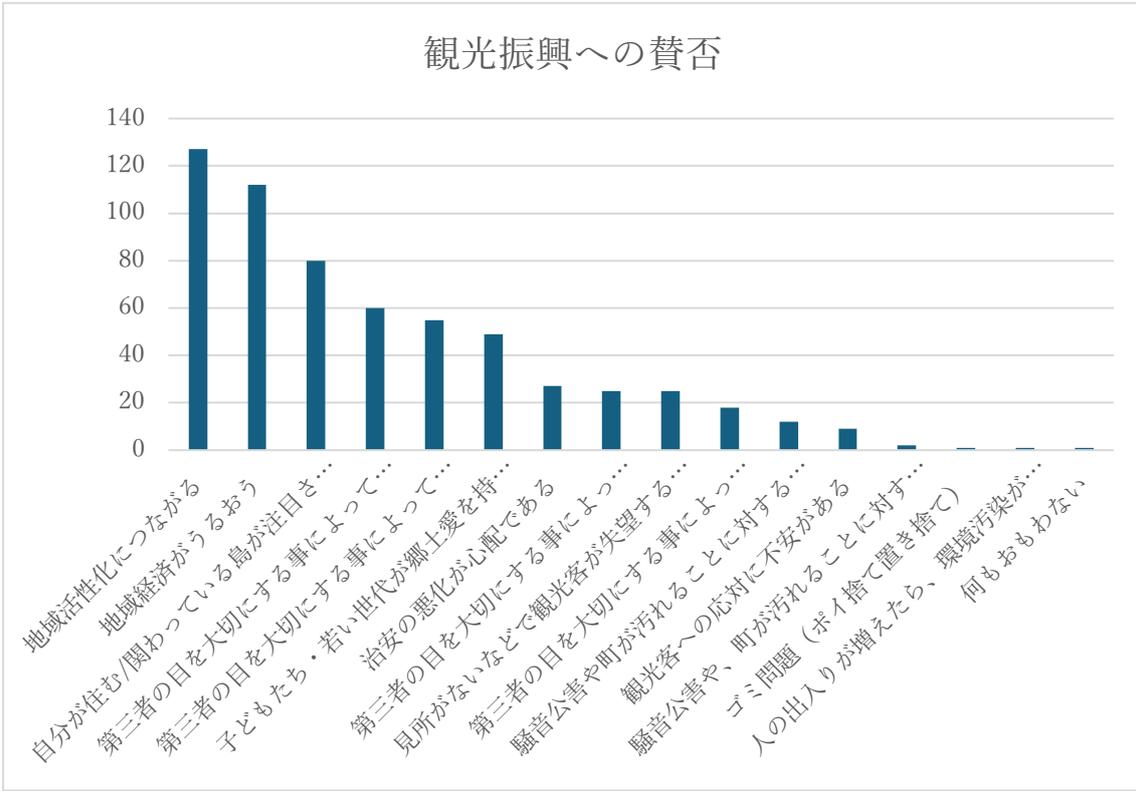
※その他の有料ガイドツアー・体験プログラムはエコツアー、自転車ツアー、農業体験ツアー、ビーチピクニック、オーダーメイドツアー、芭蕉布体験など

#### (6) 島民から見た評価とニーズ

本計画の策定にあたり、2024年8月より、島民を対象とした観光アンケートを実施しました。その調査によると、島民意識としては「地域活性化につながる」「地域経済がうるおう」等の意見が多く、観光振興を歓迎する傾向が高めであることが分かります。

一方、沖永良部島に合う観光振興の姿として、島の皆さまの多くが「自然資源・景観の保護や保全」「文化継承、島らしさを感じる暮らしを残していくこと」に目を向けていることが分かりました。

このことから、沖永良部島は今後、島民の皆さまが地域らしさを認識し、島の価値を見出しながら、島内での経済循環を高めていけるようなサステナブルな観光地としての取り組みを進めていくのが良いと考えています。



出所：おきのえらぶ島観光モニタリングアンケート

### 3. 観光をとりまく変化

#### (1) コロナ禍からの再生

コロナ禍により国内外の旅行産業は大きな打撃を受けましたが、現在は本格的な回復基調にあります。沖永良部島の入込客数はまだコロナ前までの水準には戻っていませんが、宿泊施設軒数の微増に加え、来訪者数にも増加傾向が見られます。

一方で、国は2023年に発表した「観光立国推進基本計画」の中で“量から質への転換”を掲げており、観光客数だけではなく観光消費の拡大や質の向上によって持続可能な観光地づくりを進めるという目標を示しています。

#### (2) 持続可能な成長（SDGs）とサステナブルツーリズム

#### (3) サステナブルツーリズムに対する旅行者、観光地の意識

#### (4) 選ばれる観光地づくり

#### (5) 観光を入り口に住民の暮らしを豊かに

### 4. 観光基本計画策定の方向性と基本的な考え方

#### (1) 策定の方向性（理念）

策定にあたって、その方向性（＝観光基本計画を推進していく上での理念となるもの）については、前項にある現状分析を踏まえて「普遍的・潜在的な価値（経済面・非経済面）」「現在から長期的な未来の子どもたちに向けて」という、これからの沖永良部島の観光において持続可能性に配慮した二つの視点を持った上で、以下のように考えます。

① 沖永良部島の基幹産業である農業や島民の生活満足度に影響の大きい、「教育」「福祉」「交通」等の添え木となるような観光を目指す。

#### ② 住んでよし・訪れてよしの魅力ある地域づくり

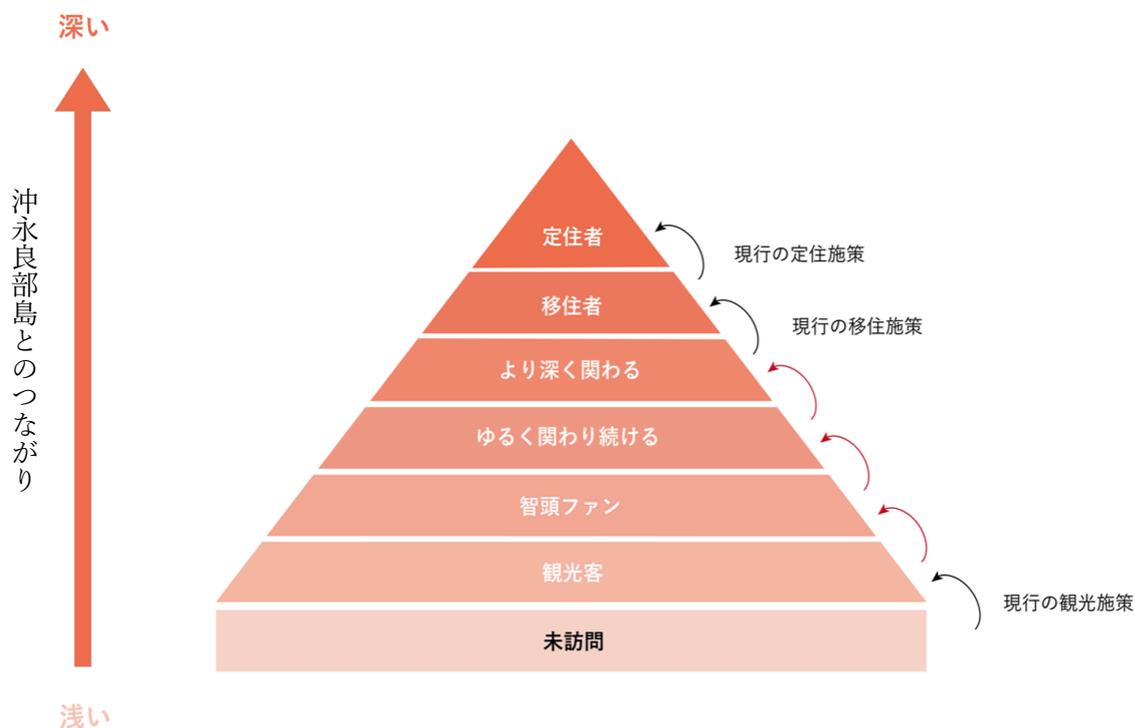
- ・地域の魅力、価値の再認識と誇りや愛着の醸成
- ・地域活性化や持続可能性の向上に対する相乗効果
- ・店舗、事業、公共交通等の維持や継続性の向上
- ・歴史文化や自然資源の保全と継承

これらの視点に基づき、これからの沖永良部島が目指す観光の姿は、島を豊かにする、暮らしを体感する観光のあり方を考え、観光客も含めた共創的な観光地経営を目指しま

す。

<第二次おきのえらぶ島観光基本計画の理念>

## 暮らしとつながり、 島の未来をつなぐ観光



### (2) 沖永良部島の観光が目指す将来像

計画策定にあたって実施したアンケートや個別事業者ヒアリングの中では、観光振興への賛否、島が目指すべき観光振興の姿など、さまざまな意見を抽出しました。それらを踏まえて、各施策を実践し、計画の内容を実現していくためには、観光協会や観光事業者、和泊町・知名町の両行政だけでなく、島で暮らす人たちも含めて同じ方向を向いて主体的に取り組んでいく必要があります。いかに自分ごと化していくか。そのためには、観光に対する意識を「みんなで沖永良部島の観光地経営に取り組む」という方向に変えていき、観光による利益や価値を地域内に波及させる交流・消費・滞在型観光を実現していくことが重要だと考えます。

中・長期の視点で沖永良部島の未来を見据えた時、10年後に島に暮らす一人ひとりがどうなっていたいのか。地域の持続可能な発展や島民・来訪者の幸せにつながるよう、さまざまな要素について戦略的に取り組める体制をつくっていくことが何よりも大切だと考えると、沖永良部島の観光の土台は島民の暮らしで、その暮らしをより魅力的にすること、そして暮らしの魅力を言語化していくことが、沖永良部島の観光における共感値と付加価値の向上につながります。

以上のことを踏まえて、第二次おきのえらぶ島観光基本計画におけるビジョンを次のように定めます。

<第二次おきのえらぶ島観光基本計画ビジョン>

## ここにある暮らしを大切に。 島民みんなの観光しまづくり

(3) ビジョンを実現するための戦略(=ミッション)について

第一次おきのえらぶ島観光基本計画(Island Plus おきのえらぶ島計画)においては、持続可能な観光推進により、島人の誇りを高め、将来にわたり心豊かな島のくらしの実現を目指すものとして、「離島」であることについてネガティブに考えてしまいがちな要素を、「離島だからこそできること、価値があること」といったポジティブな発想への転換を図ることを軸として考えていました。

その上で、多様な「ひと・モノ・コト」のつながりを創出し、島民のアイデンティティを刺激し、持続可能な島を支える原動力となる観光を通じた「ほんとうの交流」を促していくための「基本戦略を支える3本柱」を掲げました。

第二次おきのえらぶ島観光基本計画においても、その考え方を踏襲し、以下の3項目を将来目指すべきビジョンを実現していくために必要な戦略(=ミッション)として掲げます。

- ① Pure ピュアブランド : 島のものにこだわる
- ② Lifestyle ライフスタイル : 島の暮らしにこだわる
- ③ Spirits スピリッツ : 島の精神にこだわる

① Pure ピュアブランド (島のものにこだわる)

特産品開発をはじめ、観光産業における全ての消費活動においては、沖永良部島産の農水産物など、可能な限り島内で生産・製造されたモノの仕入れ・使用を進め、域内調達率の向上を図り、観光による経済効果を地域全体に環流させる。他産業の観光への興味を惹き、観光への理解を進めるとともに、島内の多様な産業連携により新たな価値創造を目指す。

## ② Lifestyle ライフスタイル（島の暮らしにこだわる）

島人一人ひとりに島のライフスタイル・文化こそが最大の魅力であるということへの気づきを促すため、来訪者との交流機会を創出する。島の伝統文化を背景とした衣・食・住は、来訪者にとって最も興味を惹くコンテンツであり、島人とのほんとうの交流が期待できる。この循環こそが島の価値の再認識を促し、島人の誇りを高め、心豊かなライフスタイルへと導く。

## ③ Spirits スピリッツ（島の精神にこだわる）

「敬天愛人（けいてんあいじん）」という西郷隆盛の教えが育まれた沖永良部島の島人は、情に厚く、人のつながりや調和を重んじる。他者を労るこの精神は、島外からの来訪者をあたたかく迎え入れるホスピタリティにも通じる。互いを尊重し認め合う心こそが、島に調和をもたらし、来訪者との交流をより良き機会とするということを、一人ひとりが理解し実践に努める。

## (4) アクションプランと重点施策

第一次おきのえらぶ島観光基本計画では、15のアクションプランを定め、その中で重点施策と基本施策を設定するという手法でした。第二次おきのえらぶ島観光基本計画においては、各施策の実施状況や実施内容、結果を踏まえて、ビジョンの実現に向けてどれだけの効果があったのか、検証と見直しを行なっていくことを前提に、以下の構造とします。

<ビジョン>

ここにある暮らしを大切に。島民みんなの観光しまづくり



① Pure ピュアブランド (島のものにこだわる)

重点施策とアクションプラン

② Lifestyle ライフスタイル (島の暮らしにこだわる)

重点施策とアクションプラン

③ Spirits スピリッツ (島の精神にこだわる)

重点施策とアクションプラン